10

母として女人（にょにん）の身をば裂ける血に
清まらぬ世はあらじとぞ思ふ

歌意

長い間、母体で育んだ新しい生命を産むという崇高な業はなんと神秘的なことでしょう。その瞬間の血と愛で社会が浄化されないはずはないと私は信じています。

掲出歌集　『青海波』明治45（1912）年1月
初　　出　「新日本」明治44年7月号　題は「悲しき跡」
（晶子33歳）

・所 在 地
　堺市民芸術文化ホール
　（フェニーチェ堺）
　（堺区翁橋町２丁１－１）
　南海高野線堺東駅下車
　南西へ徒歩６分
　大阪中央環状線の大通
　（フェニックス通り）を右へ
・建　　立
　昭和62年５月30日
　晶子をうたう会
・デザイン
　富村俊造
　（山の動く日の会代表）
　晶子のブロンズマスクは彫
　刻家　白石正義
・書
　森藤子（晶子の六女）
・連 絡 先
　堺市文化課
　072-228-7143

「晶子をうたう会」第５回の「晶子リサイタル」を記念して、その会場である堺市民会館（現・フェニーチェ堺）に建立された。

除幕には晶子の六女、森藤子さんが立ちあわれた。

「産という命掛けの事件には男は何の関係もなく、また何の役にも立ちません。これは天下の婦人が遍く負うている大役であって、国家が大切だの、学問がどうの、戦争がどうのと申しましても、女が人間を生むというこの大役に優るものはなかろうと存じます。」

（中略）

「児を産むから穢わしい、戦争に出るから尊いというような偏頗な考えを男も女も持たぬように致したいと存じます。」

『一隅より』産屋物語（明治44年）